

論文和文要旨

論文題目

Transizione delle figure femminili nella letteratura italiana del
Novecento: punti sulle opere in prima persona di Moravia

20 世紀イタリアにみる変化する女性像
—男性作家による女性一人称作品を中心に—

氏名

柴田瑞枝

Mizue Shibata

20 世紀イタリア文学を代表する作家、アルベルト・モラヴィア（1907-1990）は、男性でありながら、女性一人称という叙述形式を使用し、ときに女性と一体化して、『ローマの女』（1947）を始めとする女性を主人公に据えた作品を多く執筆している。これらの作品に見られる女性像は、戦後の劇的な社会の変化を反映しながら、次第にその様相を変えていく。本論では、特にイタリア文学の分野において、未だひとつのジャンルとしてカテゴライズされることが稀である「男性作家による女性一人称」という語りの様式の特異性に注目し、モラヴィアとその同時代の作家の書いた女性一人称作品を取り上げ、その語りの持つ意味や、「真正さ」について検討する。同時に、女性の生について生涯強い関心を持ち続け、その省察の結果を随時作品に反映させることを意図していたにも拘らず、一部の批評家たちから「女嫌い」の作家と評されたモラヴィアの、これらの作品における女性描写へのアプローチを分析する。

第 1 章： 女性一人称叙述についての考察

第 1 章では、「女性一人称」というひとつの語りの様式について概観する。「女性一人称」という語りの選択が、ある特定の時代や社会において何か意味するところがあるのか、または、飽くまで一人の作家のごく個人的な文体の選択という蓋然的なものに過ぎないのか、などの諸点について考察する。したがって、日本を含む世界の文学において、男性作家によって女性一人称が用いられた例をいくつか取り上げ、その流れの全体像を掴むことを目指す。ヨーロッパでは、18 世紀、

デフォー（1660-1731）やリチャードソン（1689-1761）がそれぞれ『モル・フランダーズ』、『パミラ』などの女性一人称による長編小説を世へ送り出した。近代小説の父と呼ばれるこれらの作家たちがこのような叙述形式を選択したのは、名誉革命や王政復古などの劇的な事件を次々に経験した17世紀イギリスで、それまでの伝統的な価値観が覆され、ジェンダーの境界線が曖昧化したという歴史的背景が影響していると考えられる。ジェンダーが社会的に重要な問題として意識されたときに、男性作家が女性一人称による小説の執筆を試みるという構図は、戦後イタリア文学のモラヴィアやパヴェーゼ（1908-1950）の場合にも当てはまる。

第2章： 『ローマの女』：モラヴィア初の女性一人称長編

『ローマの女』は、モラヴィアが残した6つの主要な女性一人称作品のうち、最初の長編小説にあたる。また、作家が初めて庶民を主人公にして書いた小説であるという点でも重要である。処女作『無関心な人々』（1929）の出版後、10年以上も文体の模索に苦しんだ作家は、女性一人称の発見に助けられて長年の危機から脱出することに成功し、世界的な作家としての地位を揺るぎないものとした。その2年後、モラヴィアと同時代の作家パヴェーゼも、彼にとっては唯一となる女性一人称小説『女だけの間で』（1949）を発表し、高い評価を受けた。

イタロ・カルヴィーノ（1923-1985）は、評論『獅子の気概』（1955）において、戦後のイタリア文学の状況に触れ、ファシズム政権が倒れ、ようやく表現の自由が保証された時代、作家や知識人たちは、歴史に対するコンプレックスを乗り越えることができず、伝統的な知識人型の男性登場人物を生み出すことができなかつたと指摘する。同時に、女性に「良妻賢母」の役割を課していたファシズム政権の崩壊後、女性を取り巻く環境が大きく変化し、社会一般の彼女たちに対する期待や関心が高まった。こうした状況が相まって、モラヴィアやパヴェーゼのような男性作家たちに、女性一人称で書く道が拓かれた可能性が考えられる。

本章ではさらに、先行研究を参照しつつ、モラヴィアとパヴェーゼの女性一人称による叙述がどのような特徴を備え、またどのような問題点を孕んでいたかについても分析する。

第3章： 『チョチャリーアの女』：進化した女性一人称

第3章では、モラヴィアが妻エルサ・モランテ（1912-1985）と共に過ごしたサント・アガタでの疎開生活を下地として書いた、『チョチャリーアの女』（1957）を取り上げる。『ローマの女』からちょうど10年後に出版されたこの作品においては、前者に比べ、主人公兼語り手チェジーラの「証言者」としての安定した語りが目される。『ローマの女』において批評家たちの間で問題視された、語り手の属する貧しい社会階級と高度な言語運用能力とのギャップは、『チョチャリーアの女』においてはまずまず改善されたといえるだろう。しかし、チェジーラもまた、ときに人物像にそぐわない鋭敏過ぎる政治感覚を示し、図らずも作者の

イデオロギーを露呈するなど、語りの「真正さ」の観点からは依然として問題が残った。

第4章： 70年代モラヴィアの女性像：95の女性一人称短編についての考察

フェミニズムが隆盛を極めた70年代、モラヴィアは60年代後半から新聞『コッリエーレ・デッラ・セーラ』に発表していた女性一人称短編を3つの短編集『パラダイス』（1970）、『もうひとつの生』（1973）、『女性諸君！』（1976）にまとめた。ここに描かれる女性たちは皆、自分たちが女性であるがゆえに社会的に不利な状況に置かれていることを自覚しているが、未だそうした状況を打開する術を識らない。そのためモラヴィアは、これら3つの短編集をまとめて、「無力の自覚」とタイトルを付けることを考えたという。

モラヴィアは、女性の発言権がとりわけ強く主張されたフェミニズム最盛期に、女性一人称を用いて女性たちの内面を描こうとし、一部のフェミニストたちから激しく非難された。しかしながら、これらの批評は詳しいテキストの分析を欠いており、説得力を持つものではなかったため、却ってモラヴィアのパブリック・フィギュアとしての存在感を強調することにもなった。

第5章： 『深層生活』におけるモラヴィアの「私」：女性一人称と「対話」の叙述形式

モラヴィアの女性一人称作品の環は、ローマの高級住宅地に育った美少女デジデーリアが、ある「声」に導かれてテロリストになるまでを、作者のインタビューに回答する形式で語る『深層生活』（1978）によって閉じられる。小説の完成までには7年もの年月が費やされたが、その間に、語りの形式は三人称から一人称へ、一人称から対話の形式へと順に変化し、最終的に、デジデーリア（イド）、「声」（超自我）、作者「私」（自我）という、三つの視点からなる強力な語りの形式が構築された。なかでも作者「私」は、黒子役に徹し、絶妙なタイミングで相槌を打ったり、的確な質問をしたりして、語り手に自由に、自然に話を展開させるための効果的な役割を果たしている。

出版当時は、売春、宗教冒涇、近親相姦など、スキャンダラスな側面ばかりが注目を集め、敬遠されがちな作品であったが、テキストを詳細に分析してみると、'68年の「異議申し立て運動」に対するモラヴィアの複雑な政治的態度が浮かび上がってきて、作家の知識人としての姿勢を考察するうえでも大変興味深い。モラヴィアの対話形式のより高次の統合を目指したかに見えるこの作品によって、作家の女性一人称語りの「真正さ」の追求は、ひとまず成功裡に達成されたといえるのではないだろうか。